

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第199号

イザヤ 65:1

平成24年4月27日

また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上になわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持っていた。その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン」という名であった。そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た……あなたが見たあの女は地上の王たちを支配する大きな都のことで……

それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。『わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです……彼女は心の中で、『私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない』と言うからです。それゆえ一日のうちに、さまざまな災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます……『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た……』

ヨハネの黙示録 17-18章

ユダヤ暦の「イヤル（第二）の月の五日」、今年四月二十六日、イスラエルは六十四年目の建国記念日を迎えました。二十四日の夕暮はイスラエルの戦没将兵記念日、二十五日の夕暮は独立記念日で、記念祭から祝賀へと今年もイスラエルの国家復興の奇蹟が思い起こされました。1948年、1967年、1973年と三回の戦争を経て、イスラエルの人口はこの六十四年間で、806,000人から7,881,000人に増え、そのほぼ73.5%がユダヤ人、20.6%がアラブ人で構成されています。日本の出生率1.3%の二倍以上の2.8%のイスラエルは移民も多いので、人口は着実に増加し、「バビロンの娘は、踏まれるときの打ち場のようなだ。もうしばらくで、刈り入れの時が来る……シオンに住む者は、『私と私の肉親になされた暴虐は、バビロンにふりかかれ』と言え」（エレミヤ書 51:33-35）はじめ、聖書の諸預言の成就、イスラエルの贖い主メシヤによる支配の時代の到来は日一日と近づいています。

イスラエル国家誕生の闘いは四千年前、アブラハムの二人の子、イシュマエルと約束の子イサクとの闘いに始まり、近年では、十九世紀末に起こったシオニズムの萌芽、ユダヤ人には祖国が絶対必要、約束の地への帰還の動き一が、二十世紀に大きく進展し、今日に至っています。二十世紀初頭には二つの大きな出来事がありました。1917年に英国のアレンビー将軍がエルサレムをオットーマン・トルコの手から奪ったことと、同年、英国政府がシオニズム支持を表明、パレスチナにユダヤ人の居住地を建設しようとの「バルフォア宣言」を公表したことです。シオニストたちは荒廃していたパレスチナに不在地主たちから土地を買い移り住み、植樹し、灌漑設備を整え始めました。農耕生活ができるようになった時点で、イスラム圏の人たちもパレスチナに住み始めるようになり、ユダヤ人、アラブ人の人口が増えるにつれ、紛争も増加の一途にありました。1948年に国連の承認によって、まさに「だれが、このような事を聞き、だれが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で産み出されようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ……わたしは産ませる者なのに、胎を閉ざすだろうか……」（イザヤ書 66:8-9）との預言通り、一日にしてイスラエル国家が誕生したとき、アラブ人は、パレスチナをイスラエル（ユダヤ人）とヨルダン（アラブ人）の二国に区画する分割案を拒絶し、戦いを挑んだのでした。このとき、紛争に巻き込まれてイスラエルの支配下に置かれることを嫌い、パレスチナからヨルダンや近隣の諸国に逃げたアラブ人が今日、パレスチナの難民と呼ばれている人たちです。同じアラブ人諸国に逃れたのに帰化できず今日も中東の近隣諸国の難民避難地区に住んでいるこれらのアラブ人たちは、現在ではそのほとんどが二世、三世になっていますが、イスラエル内の以前の住居に戻る権利を要求しているのです。1948年のイスラエル独立戦争は神の奇蹟的なご介入でイスラエルが勝ちましたが、何の平和協定に調印されることもなく、境界線が定められ、平和の口約束がなされただけでした。1967年に、外交政策が不成功に終わった後、エジプト、シリア、ヨルダン、イラクはじめ、イスラム軍による「六日戦争」が勃発しましたが、イスラエルの勝利に終わり、このときイスラエルは期せずして、ゴラン高原をシリアから、シナイ砂漠をエジプトから、東エルサレムを含めた西岸地区をヨルダンから奪ったのでした。後にイスラエルはエジプトのサダト大統領との会談で、シナイ砂漠を返還しましたが、奇しくも残りの地区はすべて、神がアブラハムに、イサク、ヤコブを通しての子孫に与えると四千年前約束された地でした。パレスチナ人は今日も、イスラエルが野心的に占領したこれらの地は返還されるべきだと見ていますが、イスラエルは、受けて立った戦争での戦利品

を所有するのは当然と見ており、この中東問題は単なる二国間の対立ではなく、折り合わない二つの宗教、二つの世界観、二つの経典に端を発する憎しみに根づいているので対処療法では解決はあり得ないのです。

イスラム教徒は西欧文化を退廃と見ており、第一次世界大戦以来、西欧諸国のイスラム圏侵略が続いていると捉えています。実際、中東のすべての諸国の国境は大戦後、西欧の列強が定めたのでした。したがって、西欧化されたイスラエルはイスラム圏のとげで、地を互いに分割するどころか、パレスチナからの一掃、国家撲滅以外にないとイスラム圏の人たちは考えているのです。しかし、退廃的な西欧文化を毛嫌いしながらも、イスラム圏の人たちは西欧の工学、科学や金権を好み、西欧の兵器、軍事産業、ファッション、精油産業を自国の活性化、富国化に意欲的に取り入れているのです。イスラム教徒たちは開祖ムハンマドが天に旅立ったという伝説を記念して、687年に神殿の丘にアル・アクサ・モスクを建て、今でこそエルサレムの重要性を主張していますが、実際には、ユダヤ人が十九世紀末にパレスチナに戻るまではほとんど顧みられることはなかったのです。ユダヤ人は西暦七十年にエルサレム神殿を失い国外追放され、世界各地に離散の状態が続いたのですが、千九百年も後に、奇蹟的に、しかし紛れもなく多くの預言の成就として、パレスチナに集められ、国家を復興したのでした。

聖書にはエルサレムと対照的に描かれているライバル都市が登場します。バビロンです。バビロンの誇りは、自分は女王であり、夫ヤーウエに捨てられた妻エルサレムのような「やもめ」ではなく、富み栄え、悲しみとは縁のない都であると、いつもエルサレムとの比較で語られています。背信のゆえにヤーウエの怒りを買って、約束の地から追放され、国家喪失、エジプト、アッシリヤ、バビロン、ペルシャ、ローマはじめ諸外国による隷属、捕囚、国外離散、大虐殺の歴史を耐え忍んで来たイスラエルの惨めさを嘲弄する、敵を代表するのが「大バビロン」です。創世記11章に登場する神に反逆した町「**バベル**」はまさにこのバビロンのことで、イザヤ書、エゼキエル書、ダニエル書には実在の都バビロン、かつての大バビロン帝国に語られた預言を通して、未来の悪の巣くつの滅びが究極的なバビロンの滅びとして象徴的に語られています（拙著『一人で学べる諸預言書』参照）。エレミヤ書51章にはペルシャによるバビロン帝国の滅びが詳細に預言されており、エレミヤの時代この預言は見事に成就したのですが、同時に、「**主よ。あなたはこの所について、これを滅ぼし、人間から獣に至るまで住むものがないようにし、永遠に荒れ果てさせる、と語られました……このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない**」とあるように、まだ実現していないバビロンの滅びも多く描かれています。冒頭に引用した淫婦の滅びに象徴されている大バビロンの滅びはこの世の終わりの預言、まさにこれから起ころうとしている預言です。

この預言の解釈を、終末末期、反キリストなる背信者と偽預言者が出現する直前の宗教的（特に、キリスト信仰からの背信）、道徳的、経済的退廃のこの世の神による裁きの描写として象徴的に捉えるか、文字通り、過去の大バビロン（今日のイラク）の復興、滅びと捉えるかで見解は完全に分かれています。故サダム・フセインは自らをネブカデネザルの子であると称し、過去の帝国の栄華再現を夢見て都バビロンの再建を始めたのですが、前者を主張する人たちは、バビロン帝国がペルシャに滅びた後二千三百年もの間、都は廢墟となっていたことから、諸預言は事実上成就したとみなすべきであると言い、文字通りの解釈では「**聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている**」や「**七つの頭と十本の角を持つ獣の秘儀**」などの説明ができないという点を指摘しています。しかし、イスラエルが千九百年の国外離散の後、国家復興を遂げたように、今日イラクで、世界中の国々の食指を動かしている国家再建の新たな動きが起こっていることは、この預言を解釈する上で注目に値します。「**だれもおまえから石を取って、隅の石とする者はなく、礎の石とする者もない。おまえは永遠に荒れ果てる**」というエレミヤの預言にもかかわらず、古代バビロンの地の石を用いて、サダム・フセインが始めたバビロン再建工事は今日着実に進んでおり、イラクという国の存在自体が、聖書が預言しているような、死海に沈んだソドムとゴモラの滅びのような形ではバビロンはまだ滅びていないことを物語っているようです。

四月にサダム・フセイン政権崩壊後九年目を迎えた、世界で第二番目の原油、天然ガス埋蔵国のイラクでは、昨年末の米軍撤退後も民主化に向けて国家開発計画が推し進められており、未来の資源確保を条件に、世界中の国々が復興支援、融資に乗り出しています。聖書に登場する「**デナリ**」を連想させるイラクの通貨ディナールの14%を保有している米国は、42%をまだ確保しているイラクに次ぐ大口投資国で、一、二年のうちにイラクが世界最大の精油生産国になるよう支援し、価値が激増したディナールで米国が現在負っている莫大な借金を返済しようとの計画もあるようです。資源に乏しい韓国は、まだ砂漠地帯の40%が未開発のイラクに精油生産のための技術支援、開発の権利を獲得するため、率先して三十五億五千万ドルの融資に調印しました。世界中の国家が食指を伸ばしている最中、日本でも、「イラク政情により価値が暴落しているイラクの通貨ディナールは今なら安い値段で入手できる。原油埋蔵量が膨大な同国の経済が復興すれば、交換レートが数百倍になり、大変有利な投資である」という宣伝文句で投資の勧誘がなされており、他方で、詐欺に対する警告も出ており、賛否両論のようです。もし現在のイラクに向けての世界の動きが、黙示録が描写している世界中の商人、投資家たちを魅了する拝金主義の台頭であるなら、一瞬のうちに富を築きあげることができることは間違いないでしょう。しかし「**わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです**」と警告されていることを、つかの間の快樂を求めて無視してはならないのです。神の預言の究極的な成就是時間の問題です。